

創刊号

No.1

地域医療だより

奥三河の風

かせ

[発行元]新城市地域医療支援センター
電話 0536 (23) 7602

[協 賛]設楽町、東栄町、豊根村
新城医師会

[発行日]平成 20 年 7 月 1 日 (火)

創刊のごあいさつ

新城市長 穂積亮次



新城市長 穂積亮次

皆様には益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。さて、健全な社会生活を営む上で最も大切なことは健康ではないでしょうか。健康で安心して暮らせる地域社会を築くためには、保健・医療・福祉を一連化した、地域包括ケアの充実が不可欠であります。現在、東三河北部医療圏の基幹病院である新城市民病院の問題は、東三河南部医療圏を巻き込んで広域的な問題となっております。新城市民病院の改革を進めることは勿論ですが、それに連結して、弱体化している夜間の1次救急受入体制の整備も急務となっております。また、今後更に需要が高まる在宅医療の充実が必要となっております。保健・医療・福祉の一体的な整備に向けて、病診連携、医師会との連携などによる地域医療の充実を図るため「健康医療部」を新設いたしました。何を成すにも肝心なことは人の和であります。そこで、地域医療の人的ネットワーク化を進めることといたしました。地域医療に携わる医師及び関係者を紹介することによって、地域医療の現状と問題点等を共有するひとつの手段として「地域医療だより」を発刊するものです。この趣旨に賛同いただき寄稿いただきました名郷先生、また協賛いただきました設楽町、東栄町、豊根村、新城医師会に対して、改めてお礼を申し上げます。発刊にあたってのご挨拶といたします。

私と奥三河のこれまでとこれから

社団法人地域医療振興協会 地域医療研修センター長 名郷直樹

【自己紹介】



地域医療振興協会 名郷直樹

1961年の名古屋生まれです。1986年に自治医科大学卒業のあと、2年間の臨床研修を経て、1988～92年の4年間、1995～2003年の8年間、合計12年間にわたり、当時の作手村国民健康保険診療所でお世話になりました。

2003年より、へき地医療振興支援のための公益法人である、社団法人地域医療振興協会の地域医療研修センター長として、へき地医療の専門医育成に取り組んでいます。2008年からは、地域医療振興協会が運営する臨床研修病院の一つである東京北社会保険病院の臨床研修センター長として、病院の内科外来を研修医とともに担当しながら、20人を超えるへき地医療を目指す若い医師たちと毎日を過ごしています。

また、奥三河の中核病院の役割を果たす新城市民病院に月に2回はお邪魔して、自治医大の後輩医師や愛知県へき地医療支援機構とも協力しながら、奥三河の地域医療についても取り組んでいます。

【奥三河と私】

奥三河と私の関係は、12年間の作手村国民健康保険診療所勤務時代にさかのぼります。ついこの間という気がするのですが、最初に赴任したのは1988年、私自身が26歳のときですから、もう20年以上前のことになってしまいました。妻と1歳の長男、3ヶ月の長女の3人と、作手高里の医師住宅に引っ越したときのことを、まだよく覚えています。その後、へき地医療のために設立された自治医科大学の卒業生として、自分自身の意思というより、義務としてのへき地勤務として、作手村にお世話になったわけですが、2年間研修後の義務としての勤務とはいえ、医師としての実力はまったくお粗末なもので、住民の皆さんには、お役に立つというより、むしろご迷惑をおかけするばかり、作手の住民の皆さんから、私のほうが教わることばかりであったと、今になって当手を振り返っています。その後3年間の母校自治医科大学での研修を経て、最初の赴任でご迷惑をおかけした分を取り戻そうと、2度目にお世話になったときには、大学での研修中に勉強した、臨床疫学、行動科学という学問をベースに、へき地診療所でこそ最高の医療を、というような意気込みで、日々の診療に当たりました。

とかくから回りしやすく、周囲とぶつかりがちな私でしたが、周囲の皆さんの様々な支援に支えられながら、8年間にわたって診療所医療を何とか継続することが出来ました。この経験は、私にとってなにものにも換えがたいものとなりました。今でも東京都内の病院の外来をやりながら、診療所時代の多くの患者さんのことがたびたびよみがえってきます。

【家族と奥三河】

最初の赴任時にまだ赤ん坊であった長男、長女や、最初の赴任中に生まれた二男の3人は、小中学校の大部分を作手村でお世話になりました。作手の子とっていいくらいです。友人にどこの出身かと聞かれると、愛知県の作手村と答えているかもしれません。

その3人の子供も、上の二人はすでに大学生、末の二男も高校3年生です。長男は、成人式を作手村で迎えました。首都圏の満員電車で1時間以上も揺られながら大学に通う毎日ですが、満員電車も渋滞もない、自然に囲まれた、作手村時代の生活のよかったところを、実感しているのだと思います。私自身も、若干都市の生活に疲れたところもあり、作手村での生活を、たびたび思い出します。人は都市に集まっているけれども、本当は田舎の時代ではないかと、実はそんな気がしています。都市の時代から田舎の時代へ、工業の時代から農業の時代へ、そういうチャンスが、今再び田舎に来ているのではないかと、満員電車で押しつぶされそうになるたびに、そんなことを考えます。こんな都市生活が長続きするはずはないのです。



テレビ会議システムでの勉強会

【今でも続けていること】

作手村診療所勤務時代から、休むことなく今まで続けている活動が一つあります。それはテレビ会議システムを使った勉強会です。月1回ではありますが、奥三河の自治医大の卒業生が赴任する医療施設やその他の参加希望者も仲間に入ってもらいながら、その時々最新の研究論文を読むという勉強会を10年以上にわたって続けています。一時は何十もの参加者が、名古屋や遠く青森からもあったりする時期もありました。

そうしたときに比べると最近ではやや停滞気味ですが、途切れることなく、今も続いています。

これまでに500以上の医学論文を読んできたと思います。そして、ただその論文を読むだけではなく、その論文を奥三河の医療に反映させ、その時々最高の医療を提供しようと、努力してきました。高血圧や高コレステロール、糖尿病については、全国の最先端の施設に先駆けて、より質の高い医療を提供できる仕組みが出来たのではないかとひそかに思っていたのですが、医学生や他の医師には、なかなかそうは思ってもらえないところが難しいところです。



木村医師（手前）と中村医師（奥）

【後輩の医師の皆さんへ】

これまで多くの医師が奥三河の医療に関わってきました。それは、自治医大の卒業生ばかりでなく、それ以前にはもっと多くの医師が関わっています。そうした先人たちが、これまでどのようなことに取り組んできたか、それを一度きちんとまとめる必要があるのではないかと思います。

のんきなことばかり書いてきましたが、医療崩壊の時代です。へき地医療に限らず、日本全体の医療が崩壊しつつあります。先人の仕事をまとめ、それを見直すところから、この医療崩壊に対する対応策を、新しく打ち立てていく。そしてその新しい波を、都市部の大病院からでなく、田舎の診療所から発信して行こう。そういう意気込みで、是非一緒にこれからはやっつけていきましょう。よろしくお願いします。

